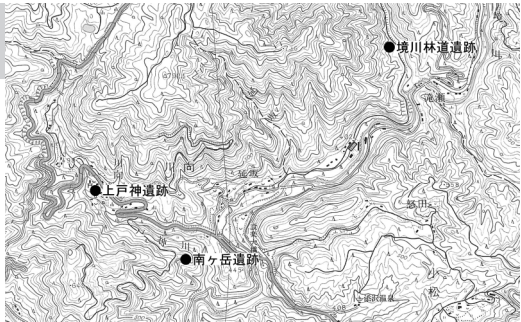


<p> <small>さかいがわりんどう</small> 境川林道遺跡 <small>みなみがたけ</small> 南ヶ岳遺跡 <small>かみとがみ</small> 上戸神遺跡 (本発掘調査A) </p> <p> 所在地 北設楽郡設楽町八橋字コハツカ地内 北設楽郡設楽町川向字南ヶ岳地内 北設楽郡設楽町川向字上戸神・下戸神地内 (北緯35度07分21秒 東経137度34分39秒) (北緯35度06分37秒 東経137度33分46秒) (北緯35度06分51秒 東経137度33分21秒) </p> <p> 調査理由 設楽ダム 調査期間 令和7年5月～7月 調査面積 178㎡(44㎡+30㎡+104㎡) 担当者 樋上 昇・水野領介 </p>	 <p>調査地点(1/2.5万「田口」50%縮小)</p>
--	---

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局より委託を受けて実施した。調査目的は遺跡の範囲及び性格の確認であり、事業予定地内にトレンチを設定・掘削し、調査を行った。

境川林道遺跡立地と環境 境川林道遺跡は、タコウズ川右岸の東向き緩斜面に立地する。斜面の裾には、遺跡名の由来となる境川林道が、タコウズ川に沿う形で南北に造成されている。

調査の概要 トレンチは、TT01～TT07の7箇所を配した。調査面積は、計44㎡である。

炭焼窯跡 調査前の踏査時に、炭焼窯跡を1基確認した。焚口は東へ開口する。焚口両袖に築かれた石垣は、右側壁の大半は原型を留めていたが、左側壁は崩壊していた。天井は全面が崩落していた。これに対し、東西の主軸方向トレンチと南北の直交方向トレンチを設定した(TT07)。

主軸方向トレンチでは、燃烧室の奥壁と考えられる石材が確認されたほか、床面において焚口と燃烧室を隔てる石材が確認された。直交方向トレンチでは、側壁と考えられる石材及び側壁外部の盛土が左右ともに確認された。

窯の法量は、焚口から燃烧室の奥行きが約5.5m、燃烧室奥行きが約3.5m、燃烧室幅が約2.0mを測る。焼成室の平面プランは楕円形を呈する。床面には石材を用いず、焚口から奥壁へやや低くなる。堆積は、埋土下に床面が検出され、床面の一部において黒色焼土層が確認された。奥壁及び左側壁では、褐色又は明赤褐色の被熱痕が壁面に沿って確認された。遺物は、生産品の一部と思われる炭化物が少量出土した。

窯跡を破壊して生育していた樹木の年輪から、築窯時期は少なくとも太平洋戦争以前と推定される。

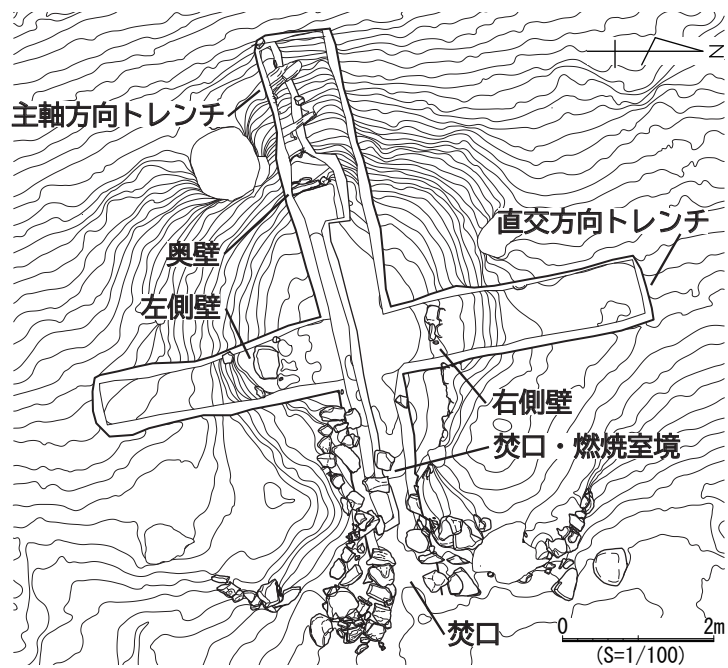
塚状遺構 遺跡周辺には、中礫が円形に集積された石積み那点在している。そのひとつを断ち割る形でトレンチを設定した(TT04)。

石積みの法量は、直径約3.0m、高さ約0.4m～約0.7mを測る。礫層下は土石流堆積層が確認された。遺物は認められなかったが、付近において近世後半以降の徳利が採集された。点在する石積みには供えられた酒器として関連する可能性がある。

これらの石積みは、令和3年度・令和4年度に調査された北設楽郡設楽町大崎遺跡の塚状遺構と類似する。法量は小規模であるが、機能は同様と想定されることから、近世以降の石塚と推測する。

緩斜面 遺跡周辺の緩斜面にトレンチを設定した(TT01～TT03, TT05, TT06)。いずれも表土下に厚い土石流堆積層が確認され、地山は検出されなかった。遺構・遺物も認められなかった。

ま と め 土石流堆積層によって緩斜面が形成された境川林道遺跡周辺は、近世以降に墓域として利用された。その後、炭焼窯による木炭生産が開始されたが、長期的な操業には至らなかった。太平洋戦争以前に植樹がなされ、以降は山林としての機能を有したと考えられる。



南ヶ岳遺跡 立地と環境 南ヶ岳遺跡は、境川林道遺跡 TT07 トレンチ配置図(S=1/100) 戸神川右岸にそびえる山地の一頂部に立地する。頂上は東西に平坦面が広がり、東・南・北は斜面となる。西には国道257号線へと通じる林道が設けられている。

調査の概要 トレンチは、TT01～TT11の11箇所を配した。調査面積は、計30㎡である。
平坦面・緩斜面 平坦面及び緩斜面にトレンチを設定した(TT01～TT10)。いずれも薄い表土下に地山が検出された。TT03・TT06において自然に形成された落ち込みが確認されたが、遺構・遺物は認められなかった。

林 道 林道上にトレンチを設定した(TT11)。碎石が含まれる造成土が確認され、地山は削平されたと考えられる。遺構・遺物は認められなかった。

ま と め 南ヶ岳遺跡において人々の生活痕跡は認められなかった。林道造成時に初めて人為的な改変が行われたと考えられる。

上戸神遺跡 立地と環境 上戸神遺跡は、戸神川左岸の河岸段丘上及び南向き斜面に立地する。遺跡中央から南東には狭小な平坦面が連続する階段状地形がみられ、北西には東堂神社が建つ平坦面が広がる。

調査の概要 トレンチは、TT001～TT010の10箇所を配した。調査面積は、計104㎡である。
中央平坦面 遺跡中央の階段状地形を構成する平坦面にトレンチを設定した(TT001～TT005)。表土下に造成土や土石流堆積層、河川堆積層が確認され、地山は検出されなかった。表土及び土石流堆積層より、時期不明の土器細片や近世以降の陶磁器等が出土した。

北西平坦面 遺跡北西の東堂神社周辺に広がる平坦面にトレンチを設定した(TT006～TT009)。表土下に造成土や盛土、土石流堆積層が確認され、地山は検出されなかった。表土より、近代以降の陶磁器等が出土した。

南向き斜面 東堂神社北の南向き斜面にトレンチを設定した(TT010)。表土下に盛土が確認され、地山は検出されなかった。表土より、近代以降の陶器が出土した。

ま と め 上戸神遺跡では、土石流堆積層により形成された斜面を削平又は造成し、平坦面及び階段状地形へ改変したと考えられる。よって、遺跡の展開は考え難い。(水野領介)